指戴き扨も浦山哀れ龍城は又今夜中の攻の用石大矢大筒八限なくも打出し給ひるゆり三の丸の塀の上ゆゑ二間除の大松明透間なく指出し珍しき事此大難の龍城に頼るべき蔓八なく長松明の光にて城の色八全白昼ゆに異るべく二三本丸八雲霞ゆ包まれたる松ゆ見へしゆ一攻せむる度毎ゆ此城八五間七間て舞上りしゆ八遠雲幷ゆ高く成て打出し筒音雲中ゆ響へなべ身の毛もよだつゆ計りと浩る龍兵共を聞て肝をけし云けゆ八塀裏なる軍兵さへゆ松明ゆど出る事覚束なく及び鉄炮八ゆも業も絶果筒をとゆ放すのみゆ其響授ゆ八間も近所ゆあるべく又松明の燃跡も一つもなしと答へなべ諸人を打て第一大君の広聖運天地よりも厚く深き故ゆ日本の九万八千乃軍神擁護て忝き義をも勇士ゆ力を合給ひしと見てより准ら所若しも知ずして如此不思議なる神助の程おそみり給ひ仏安日八魯陽の為ゆ三舎を退き巖八貳師ら為ゆ花帝も出ても滅成

「と奇異の思ひをぞ成しけり三大将加藤左馬介ら舟大将の三上六之丞を浮べ其品具ゆ聞飛弾ら一吉云ふ人物て波濤ゆ未の軍中人業ゆ八非ずと覚あり殊更此城の弾を業ずるゆ全人間の働而已ゆ非も敵より打し大筒石火矢大弓八而よりも繁りしに城内一人も中て死なると云物ゆ一其上此神秘偏ゆ秀吉公積善の広慈悲より出る事と覚ゆ夫をいりゆと云ゆ日本

國中の神社佛閣大社小社小限なく二百年三百年朽果ゐるを所
この旧記を尋ね悉く造營仕り其古名將戦死の旧跡を絶
ゐるを改め棄まさるを継せ其外比叡山の亡所と成しを改修し
あらゆる都鄙遠境の万民賤山林路道山林の貧人迄ゐまで普く
汲世安堵の恵恩天地に満て誠に日月の草木を照し降雨の
國土を潤さぐ如し故に神佛の威力を強くして神風あらゆる大軍
の囲みを破り饒の籠兵枯木に花の咲くごとやらんの危運を開
きし事のみ多さよとそうれしがる

一本此間に性肉を見もハ壕裏に建ゐる旗
竿横木に矢拾ゐ沈拾ゐ射ざるハ多くり
り母衣旗の絹ハ徳のごとく射ぬき打ぬきの龍壕櫓のごとく
射ゐる矢の鏃に若と矢とを以て驚くべしと云あり

去程に主計頭清正城居
城西生海の軍兵加藤右馬允ハ弟二玄加藤百介生林隼人佐森
本儀大夫急き来て尉山城に入替る飛騨守一吉先達て出城せ二番左
京大夫幸長三番主計頭清正城を出る代りの軍士旗指拠何も花や
かに城に飾り水兵粮玉菓薪塩曹鍋釜迄ゐまで城内に入けるハ
三大將を初て籠士正月六日の夜に入て舟に乗り蘇生しゐる地して
物具を脱とひとしく腰ハ已に抜て立居も叶ハ抜押陣の時節
に諸人も半時とも終に眼を合さるに堪て四五日より今六日に
成て曽て眸を交ぎて水に渇し食に飢ゐ寸の涙に身骨とく
だきて働くまべ早くもひまなく眠りしゐ大軍の攻を爰に見て刀
の柄に手を掛ゐハと起て見給覚せ籠兵上下に限ハ夢しまごろ
む其あひだおは大仮の夢を見る事三年除りハ止ぎりゐり爰に大

河内が舟の船頭五郎右衛門と云ものおもゆを中椀三杯あゝて後
一度をのゝくざりければ大河内右衛門を召て粥を呉よと責むると
云ども十四日が間飢める事おもばその粥を釜て粥を与ざりけるを
の外小増しと思ひ只五郎右衛門を切殺し食を奪まくして任べしと
思ひて腰ハ立ず頻小呼々まバ五郎右衛門出て大河内が面色を見うけ
間遠小在て云々ハ気色を見奉まバ子対小与ず舟を漕小
法腹立ちに尤も極小て得共先恩案と系ゝ前代未聞為る
ふき大敵の中の法龍城迄も命ゝ惜べきふあゝぢる処小第ゝ死一生
の法命を捨ハせ給へ夏涕小優曇華と存此上を苦き[illegible]
いとひ給へ養育しまるべきと存ぜしに五三日が間絶食

召食るを法ハ五郎任せ給へ恩小ハ命ハ第ゝ大事の法命を空く舟中
小て捨させ給ん事且ハ法比奥小ハ今五三日が間ゝ法城と思召
ハ私命限り五日が間ハ法意小但ハ手ゝと涙を流して養ふ
大河内是尚理小法めゝまるく詞を尽く只一対小と思し心も弱て
恥しく現のぬくぞ伏小ぢり去年七月七日小著く初し具足の表紐
今夕船中小てときゝ角て大将の女舟を初て蔚山の地より
三丁が間入海を隔て芦系為の洲先小始り掛り小繋て夜を明し
る今日秀詮公義川原の法働小法供し大功を建し法驚美と
て左文字の法腰物皆具の法馬加藤左馬介小下さる光忠の法腰
物法る筧和泉る延寿の法腰拵法馬毛利孝政る俵傾を毛利孝

茂吉島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左馬佐右の五人の面々も
皆具の口馬牧頃各面目身ゝ餘りて餘見ゝ ゝ
七日の早天三大将の本船を又蔚山の湊ゝ押入加藤百助生林集
人佐森下儀右衛を召て城近辺敵の打死を記ゝと有ゝ ゝ蔚山三三
町ゞ内外中て討死ゝる敵の死骸一万五千七百五十四人あり籠城ゝて
飢寒ゝ死ゝる者八百九十六人有ゝ我見縁ゝ記ゝ ゝ夫より三大将軍
士卒ゝ成の刻計ゝ西生海ゝ入津ゝて大勞を休ゝる夜半の比蔚山
の方ゝ當て石火矢共大筒共聲ゝ云鞋き大きゝ地ゝ動き夜比蔚ゝ
ゝ非ゝて山海大地ゆゝぐゝ立城内町屋の戸障子ゝ悉くけゝぐゝ
ゝり又五更の曉ゝ ゝ大明人二騎馳来りゝ ゝ我二人出陣の

刻より鉄炮の薬恰大山の如く積ゝ ゝ不思議の天火ゝ ゝ焼
失ゝ軍士ゝ多く焼死ゝれば我等二人ゝ弥大中に空く成との説き
戻ゝ ゝ ゝ ゝば古郎ゝ残りゝ素子ゝ一命を延ゝき為ゝ潛ゝ ゝ逃
電ゝ命を ゝ ゝ降参ゝ乃ゝ一言 ゝ ゝ積紀の幸ゝりと
て清正幸長ゝ使を ゝ招き明人ゝ ゝて ゝ國の相伴を尋明人曰今
度ゝ王加勢ゝ ゝ大軍ゝ ゝ具ゝ ゝ来りゝ ゝ甲斐ゝ ゝ蔚山の
少城ゝ攻落ゝ ゝ剩若干の軍兵ゝ ゝ ゝ何の面目ゝて大明
帰国き近所ゝ在陣ゝて一同蔚山ゝ ゝ打潰ゝ ゝと議定ゝ ゝ蔚山
ゝり三日路隔て滞在の処ゝ思の外ゝ ゝ天火ゝて軍士数ゝ ゝ死け
ゝ大國の不運ゝ ゝり三日路ゝ間の道ゝ ゝ負死人の臭ゝ ゝ

千万と云数を知ぬとぞ沿りける

諸大將西生海ハ集て評定しけるハ抑今度蔚山の籠城ハ兵粮を入る事を得ぬ又大敵の圍を得る事先手の城と云るゝ除り小ゝ過る故ろり同くハ蔚山順天を破捨て東ハ西生海をん て先まとし西ゝ南海を以て先手とする然ゝしとありけるゝ各尤と同して連署の状を調くゝ言上せんとて太田飛彈守ゝ云ふハ 右の通城ハ回々秀詮公仰ハ其奉行と成て 事煩せしめし城ゝとゝバ皆ゝを破て然ゝしとある事先ハ秀詮公 を軽んじ奉り不ハ奉行の者を蔑ハしゝ為ハ所存某ゝ分別ハ 寸々ゝ然といゝとも地事多くの口上ハ任せて相極ゝき上ゝ去

年伏見を出船の刻仰付ゝけるハ各存分の通言上ゝとゝ 竹中伊豆ゝ毛利民部大輔云ゝくハ敵の城を味方ゝ勢め味方の城を 敵より責る事珍ゝしきハ非ゝ又兵粮を入るきゝ前方ゝ 是あれハ是ゝ城出過て兵粮入難きハ非ゝ四若年の將軍公仰 付ゝゝと云八十万騎の勢を以責得ゝして少き籠兵本意を遂 し城を引入るきゝとの相違ハ各誤りゝゝ右の城ハ射ハ何ゝ 如何成苦勞身ハ積ゝ破り捨ゝきの由訴ハ有ゝ沿りと云ゝ 然ゝとゝ諸大將兎角言上ゝ沿ゝ評議ハ爰ハ加藤左馬介 判を加ゝゝ生駒雅樂頭毛利ゝ改ゝ加判せゝゝ 若れゝ左馬介答て各歴ゝ連判の言上ハ某ぬき判形ハ

乃ちて号て兵合に法大名一同ふ飛騨数主計数乃至を数人武者程
と頼む所ふ各兎や角と云て事　上の口為愚るるふ似るりと云
しかば左馬介諸ふ向て曰抑今度の蔚山籠城天竺震旦ふ未
此例を聞ぎ況や我朝ふ於てをや開闢ふ来の孫事日本の武勇
を天下に顕ぜ事豈此城ふ依ふ非や且ハ一度ふ出しかる先多の
城ふ退のるふ足往希代の名城を破ると云ひ後世の朝呼我
朝の振旋と存ぜ各の詞ふ乗し愚者推参下として上を計ひ
を汲ふ相似りといへども数下の内ふ少てハやはの破捨しとも
上意あるる歟と存るれば左ハ上ふ於てハ加判全く疑ま
若各の口係ふ十ふ上を殿下の口答を蒙りきりとも

事掌ぜさして号を知る雖然某が存分ハ如此いとて遂ふ加判せぎり
ひ飛騨守右の趣を上ふ付て口案仍中判るく蔚山ハ主計ひ居城ある事也
清正ふ判せ被ぬ故ふ三十除人連判し則其報書細ふ書付言上ふ極りる甚
由秀逢ら関白太ふ後立賀て勅る吉ひの名城ふ入べき言上沙汰の限り
言愚ふ所ふ成りといへども諸事多分の口上ふ極べき旨仰出さるふ
きハ号を言上せ成る支却て上意を背くに相似りて急き言上次
第し去るべら城近辺三十餘丁四面の山海泥川の善悪所を委
く絵図ふ写し城内の案内結知る糸舌ふ士四五人云付水夫大
勢ふて立返り風波の善悪を云ぜ渡海し早く上意の口返事帰参
すべ和ふ申付べき由筑和泉守熊谷内蔵允ふ仰付ふ重て夫ふ

宣ふるを自然美と門も此由城破〳〵と上意賀べ予ハ蔚山ハ在城
し順天ハ山口玄蕃允を籠置し此仕合上意ハ肖き流人と成て九
原ハ屋を肆もとゝいふとも日本〳〵の胡覚悟ハ及ばと宣ふ山口玄蕃
允を召て汝順天〳〵汲浦し城ハ絵図面を記し急ぎ渡番せべしと仰
ハ依て浦々の小雀丸と云船ハ乗て豆板のさうはもかく急ハ竹
島の城主鍋島信濃守天主ハ居〳〵ハ拠見の士山口ゞ馬験を見より早
く兵船数十艘ハ兵具を入甲兵を乗上使迎として出し其次リヤク梁山
山の城まで送るリヤク山より迎の兵船出て又コヂヤウの城〳〵送りセンの
城南海の城次第ニハ送て順天〳〵着し玄蕃允絵図を調〳〵
城〳〵より送て釜山浦〳〵乗廻せバ則七人の侍中〳〵名付早く言上

有ける使者正月十五日ハの一天ハ朝鮮を乗出し豆板共ハ急程ハ
廿四日伏見の城〳〵着府せ則五奉行中披露の処ハ太閤殿下御機
嫌斜なゝび使者を呼前〳〵召出され籠城の品ゝ具ハ聞し召上ゝ大ハ
悦せ給ふ〳〵江戸内大臣家康公江戸中納言秀忠卿加賀大納言利家
卿會津中納言景勝卿池田三左衛門尉政佐竹右京大夫義宣伊
達越前守正宗島津修理大夫義久等を初として左伏見の大ハ名
悉く登城し其品〳〵聞て偏ハ公の武勇拙天よりも廣大なる故也
と各感ず奉る然ハ如ハ五奉行の石田治部少輔三田常〳〵逆心乃
差有ハ依て有とも智略を廻して後関白一品大政大臣秀次公を讒
言なり失ひ奉て又秀次公をも何と様と邪心を挟ミ公の御前ハ於

て申上ゲハ秀詮ハ名代ニテ出渡海ノ事ニ付若年ニ成ル故ニ軍
法出城追討遊バサル事危キ次第ニ付若大敵出テ釜山海ヲ攻ル
敵ニ城ヲ明ケ日本通ノ湊ヲ塞ル諸勢難儀ニ及ブヘシト言上シケ
レバ公モ一先實ニモト思ハレ有テ然ルベキトノ
連判ノ言上ヲ上覧ありて以ノ外ニ喜ビ給ひ抑此蔚山ハ天下無双ノ
名城ナレ三千餘人連判ノ者共ニ蔚山ノ三字ヲ書テ守リトマヘシト
て申ス由上意ありて拘南蛮ノ繪圖ヲ上覧ありて以差図仰ル
ハ蔚山ノ城ハ九ヶ所ヨリ小方ニ成ル二三ノ丸ヲ切ル本丸ノ南ニ
付テ脇ノ石垣高サ十間ニ築上ル外ニ二ノ丸三ノ丸ニ門ヲ
二ヶ所ニ入口ヲ立ル二三本丸ノ惣ヨリ基本ヲ付ル長屋

を建ル一丸ヲ以て城より西ノ南ノ大海ヲ指渡シ横五丁
余ノ向ノ芦原ヲ堀刳リ新地ノ舟入ヲ以て日本舟ノ出ル城ニ乗
入ル様ニ成ル則要害ヲ連判ノ者ヲ申付差ル少シ出テ共城ヲ
不甲斐ナキ者ハ十人ニ成ル共二十人ニ成ル共加番ノ残シ置ベシ
出来セバ秀詮ヲ先トシテ城主ノ外ハ皆ヲ帰朝ス由上意ア
リ其内大忠ノ面々ハ感状ヲ授ケラレ下ル
其方働ヲ今不限天正十年五月備中國栄雲山城主松田左近將監ヲ
討レ同十八年ノ六月武蔵國八王寺ノ城一番乗仕候ヘ豊後國田杵
城付三万五千石御ノ行ノ外下拾万石ノ内代官ノ地ヲ以仰付其後
慶長二年七月高麗唐土表海上陸ヲ国廟ヲ以て諸軍ヲ

さゝめ舟軍に得勝利若干の大船を焼破四月南原の城を番衆仕慶州判官武万騎の大将を討ち国中の働き数度仕合の合戦切勝十二月蔚山表の大敗軍殿役備軍を駆同廿四日本丸大手の門外に切出首数九ツ取雖為小身十六万騎の軍中第一勝数度無類働仕感不斜依其度々代官訴内四万石加増ら成本知三万五千石都合七万五千石内一万石無役ゆるる六万五千石軍役の仕ハ猶徳善院浅野弾正少弼増田右衛門尉長束大蔵大輔可申也

慶長三年戊戌

正月廿六日　秀吉　朱印

右田孫彈忠

扨又内藤如安主此方へ之忠節を仕ハ付る為ハ褒美其方長先年於江ハ柴田合戦の刻一番槍を仕ハ付る為ハ褒美ハ加増一廉ハ加増ハ其ハ後於朝鮮数度番船を切取仕類手柄ハ度々可賜計ハ殊今度順天蔚山両城の引入ハ各連判仕ハ又不及加判神妙ハ覚悟ハ感不斜依其度々代官訴内三万七千石為ハ知六万二千石都合拾万石内壱万石無役九万石軍役の仕ハ若國持と聽病者方ハ者ハ嶮所ハ成猶又國主ハ仰付ハ命を全く仕ハ忠節ハ自然

乗調儀郎左衛門働不仕無越度拵て今覚悟の猶徳善院法眼堂

正少郷塙田左兵衛尉長束大蔵大輔可申也

慶長三年戊戌

正月廿六日　秀吉法朱印

加藤左馬入り

とく

と云ふ所を分る筑和泉島津又七郎ゆも山感状山寝昊を下

され使者も黄金長服拝領し御朱印の箱を請て則廿六日

伏見を乗出してより道の湊ゆらゆと次時を待て水主立代く昼夜共

ゆ急ぎられば二月二日酉の刻に対州風本の湊ゆ乗入船人を呼出

られ大事の由果印舟るり対州波海の日和ゆ問と云舟人畏て日

和ゆ出て日の船頭是より西ゆ高麗波海の格子覚乗ゆ

くらべ舟の梶を取べき事と云使者是を聞て浦人を人ゆ案べ

しと云へば右の郎衛と云もの舟ゆ乗りるが此へ幡山の嶽ゆ篝

を太く焼くべしと云て戌の刻計ゆ案出太郎左兵衛梶取を立て

烽火を知ゆ周囲を走られば更衣月の短夜も明ゆられ順風と

直艫ゆ交て三日の夕暮ゆ対州老侍の浦を梶ゆ見て乗過る霧

の間の三日月も程なく西山ゆ入る給へ暗き波上を枕として四十八

里の海上を上意を重く走りゆ船中の上下二夜一日の寄十島方を

前後を忘て ひと姫一五郎の暁を弁へぞさまどる太郎左兵